えない時代。ましてや、これから社会に出ていく女子学生たちの悩みは深刻だ。

ある日曜に開かれたミーティングに来ていた、インターンOGのひとり、東京大学文学部4年の野村津希乃さんは言う。

「社会で活躍することを期待される一方で、いつかお母さんにもなりたい。就活をするなか、両立ができるのかという不安は大きくなっていました」

時間や体力のやりくりに自信がないだけではない。専業主婦だった母親は、子どものころの自分にとっては、いつも近くにいる存在。働きながら、子どもを幸せにできるのか。そんな不安もあった。未知の共働き家庭を見てみたいと、参加した。

「働くお母さんというロールモデルに出会って、仕事も、子育ても、どっちも楽しくできるんだとわかった。あれこれ難しく考えていた学生が、プログラムを終えると、すっかり丸くなっていることも多いんですよ」

そう話す野村さんはこの体験をきっかけに、志望する就職先を変更。大手企業ではなく、自分らしい働き方ができる、あるベンチャー系企業への就職が内定したという。

そんな彼女に素朴な質問をしてみた。でもね、学校の帰りに無償で働いたり、天気のいい日曜日のミーティングに参加するより、遊びに行きたくない？

「そうですね（笑）。でも、それだけみんな、不安が大きいということかもしれません」

わいわい楽しく食事タイム。子どもたちが食事を平らげてくれるのは、「インターンをやっていてうれしいことのひとつ」と2人

男子学生も参加

一橋大学社会学部3年で、インターンOGの溝口千尋さんも言う。

「みんな意識が高いので、学生が約束に急に来られなくなったなどのトラブルは、ほとんどないですね」

このインターンシップ・プログラムの参加者の1割は男子。この日のミーティングに参加していたインターンOBの新井博喜さんは、大東文化大学の学生だった昨年、児童福祉の仕事を志望していた関係で、実際の家庭を知りたいとプログラムに参加した。

「最初のきっかけは社会勉強だったけど、子ども相手だとごまかしが利かない。自分を見つめ直すいい機会にもなりました。今の時代、男の責任は仕事だけじゃなくて、家庭にもあるということも痛感しました」

堀江さんによれば、実際の共働き家庭の大変さに触れて、将来の仕事と子育ての両立を断念した学生は男女ともに皆無。それより、「うちのママ、こういう仕事してるんだよ」と自慢げに話す子どもたちを見て、そんな親になりたいとプログラムを終える学生がほとんどだという。

ご飯の後、ちょっと遊んでからシャワーを浴びる。「ちょっぴりご機嫌ななめかな？」

さて、冒頭のアマネくんたちのママ、高安さんは、午後9時半に帰宅。詳しい報告は翌日メールで。今日の出来事をざっと報告して、この日のインターンの任務は終了となった。

学生の相談に乗る

高安さんは、企業で研修などを行うコンサルティング会社で働く。今は定時で帰れることがほとんどだが、「勉強会に参加するなど、仕事と家庭以外の時間がほしい」と、プログラムの受け入れ家庭に名乗りを上げた。料金は子ども1人の場合、1カ月18時間で3万円。

「子どもが2人なので、年配のシッターさん1人より、2人の学生のほうが、安心感も大きい。年が近いせいか子どもたちも学生さんたちとの時間を楽しんで、性格も積極的になったようです。以前シッターさんを頼むことに感じていた罪悪感も、ほとんどなくなりました」

学生たちのために、できるだけありのままの日常を見せているほか、仕事の合間のランチなどに学生たちを誘い、将来の相談に乗ることも多い。

「子どもたちを楽しませてくれる学生たちへのお礼の気持ちです。自分も就活中は、20年後のビジョンなんて、まるで見えなかった。少しでも手探りの助けになればいいと」

そんな世代間のコラボレーションで成り立つ、インターンシップ・プログラム。社会制度が変わるまで、待ってなんかいられない。がんばれ！ 女性労働力。

ライター 福光 恵

午後9時半、パパとママが続いて帰宅。「今度いつ来るの？」とアマネくん